令和２年度学術委員会学術第４小委員会報告
抗菌薬の適正使用にかかわる薬剤師の現状と課題解決に向けた研究

委員長
社会福祉法人京都社会事業財団西陣病院
三宅　健文　Takefumi MIYAKE
委員
京都薬科大学臨床薬剤疫学分野
豕瀬　諒　Ryo INOSE
昭和大学薬学部臨床薬学講座感染制御薬学部門
前田　真之　Masayuki MAEDA
公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院
上田　覚　Satoru UEDA
関西電力病院
眞継　賢一　Kenichi MATSUGI
山口大学医学部附属病院
北原　隆志　Takashi KITAHARA
京都薬科大学臨床薬剤疫学分野
村木　優一　Yuichi MURAKI

はじめに

抗菌薬適正使用支援（antimicrobial stewardship：以下，AS）加算が新設され，薬剤師によるASチームでの専従業務が期待されている。一方，薬剤耐性（anti-microbial resistance：AMR）対策や抗菌薬の適正使用を推進するといった観点では，診療報酬の有無や施設環境にかかわらず，実施することが望ましい。また，介入した取り組みは適切に評価され，公表し，国民へ還元することが必要である。しかしながら，各医療機関における個々の薬剤師が抱える問題点は明確にされておらず，具体的な解決案は示されていない。

感染症にかかわる薬剤師は，専門認定資格制度の発足やAS加算といった診療報酬改定が行われるなかで，抗菌薬の適正使用に関与し，論文という形で実績を示すことが求められてきた。しかしながら，これまでに経年的に薬剤師が報告してきた論文の内容や発表数の変化は明らかにされていない。一方，各医療機関で関与しているものの指導者不足など，個々の薬剤師が抱える問題点は明確にされておらず，具体的な解決案も示されていないのが現状である。

目的

本委員会の目的は，本邦の薬剤師が関与したASに関連する論文の特徴や報告数の経年的な変化を明らかにすることにより，薬剤師のASへの貢献内容と今後解決すべき課題を特定することである。なお，本委員会で取り組んだ内容は，現在論文投稿中であるため，本報告書では概要のみ示す。

概要

2020年12月までに公表されたASに関連する論文（以下，AS関連論文）に関して，英文誌をPubMedで，邦文誌を医中誌で抽出し，筆頭著者を薬剤師と薬剤師以外に分類して内容によりカテゴリー別に分類した。その結果，調査期間における薬剤師が筆頭著者のAS関連論文は，英文誌39件，邦文誌282件であった。これらの論文数の経年変化を調査すると邦文誌では2008年にピークを迎えたのち減少傾向にあったが，2017年から増加傾向を示し，英文誌が2018年から急増していた。時系列分析の結果，2008年の報告数の増加は感染制御専門薬剤師制度発足が影響し，2018年以降の増加はAS加算が影響している可能性が示唆された。また，薬剤師が筆頭著者の論文は薬剤師以外が筆頭著者である論文と比較して，介入や取り組み，活動評価を行った内容が有意に多かった。

まとめ

本委員会では，薬剤師によるASへの取り組みを公表された論文数の経年的な推移を明らかにできた。論文による公表数の増加は認定制度の資格要件や診療報酬制度の影響を受けることが考えられたため，資格や診療報酬制度の充実は科学的根拠の創出に有用な手段の１つであることが考えられた。また，報告された内容から薬剤師は，介入や取り組みの評価や抗菌薬の使用に関連するサーベイランス・調査を通して成果を論文にまとめていることが明らかとなった。一方，今回，病床数や診療報酬の算定状況などといった施設特性が科学的根拠の創出に与える影響は調査していないため，今後さらに公表論文を詳細に分析することで，より多くの施設でASを推進するための課題の解決策を提示したい。